

北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章復原

福田 哲之*

Tetsuyuki FUKUDA

Restoration of Chapter Structure of the *Cang jie Pian*
from the Peking University Collection of Han Bamboo Strips

要 旨

『漢書』芸文志によれば、『蒼頡篇』には秦代に作成された「蒼頡」七章、「爰歴」六章、「博学」七章の三篇から成る二十章本と、漢代に入って閭里書師が三篇を合わせ、一章六十字に区切って全五十五章に改編し、「蒼頡篇」と総称した五十五章本との二種のテキストが存在したことが知られる。

これを出土文献である漢代『蒼頡篇』に徴すると、木牘に書写された漢牘『蒼頡篇』（漢牘本）は、一章（板）六十字の分章（章分け）をもち、五十五章本に属することが明らかである。一方、竹簡に書写された北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』（北大本）は、残存簡に見える章字数が百四字から百五十二字と一定せず、五十五章本とは分章を異にするが、資料上の制約から全体の章数が知られず、二十章本との関係を含め、不明な点が多く残されている。

本稿では、まず北大本の分章復原の前提となる、本文および章字数にかかわる二つの仮説を提起した。それにもとづき、北大本が全体的な枠組みにおいて「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇の区分に従うことを明らかにし、各篇ごとに分章の復原を試みた。その結果を踏まえ、『漢書』芸文志の章数の記述について考察を加え、北大本と二十章本との関係に関する新たな見解を提起した。これにより秦代原本と漢代諸本との関係が明確に把握され、『蒼頡篇』研究のさらなる進展が期待される。なお本稿における復原結果は「北大本分章復原試案」としてまとめ、末尾に掲げた。

【キーワード：蒼頡篇，北京大学蔵西漢竹書，漢牘，分章，『漢書』芸文志】

序 言

『漢書』芸文志（以下、『漢志』）は、六芸略・小学の書目に「蒼頡一篇」を挙げて、「上七章、秦丞相李斯作。爰歴六章、車府令趙高作。博學七章、太史令胡毋敬作」と注し、さらに小序の中で次のように述べる。

蒼頡七章者、秦丞相李斯所作也。爰歴六章者、車府令趙高所作也。博學七章者、太史令胡毋敬所作也。文字多取史籀篇、而篆體復頗異。所謂秦篆者也。（中略）漢興、閭里書師合蒼頡・爰歴・博學三篇、斷六十字以爲一章、凡五十五章、并爲蒼頡篇。

この記述により、『蒼頡篇』は当初、李斯作の「蒼頡」七章、趙高作の「爰歴」六章、胡毋敬作の「博学」七章の合計二十章からなるテキスト（以下、二十章本）であったが、漢代に入って閭里書師が「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇を合わせ、一章六十字に区切って、全五十五章からなるテキスト（以下、五十五章本）に改編し、『蒼頡篇』と総称したことが知られる。

筆者はさきに北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』（以下、北大本）と漢牘『蒼頡篇』（以下、漢牘本）との比較分析をとおして、「蒼頡」「爰歴」「博学」三篇の押韻が、それぞれ特定の韻部に属することを指摘し、それにもとづき五十五章本に属する漢牘本の章序（章の順序）について検討を加え、その実態を明らかにした⁽¹⁾。これにより漢牘本（五十五章本）は、ほぼ全体的な把握が可能になったと思われるが、五十五章本と分章を異にする北大本については、資料上の制約により全体の章数が知られず、二十章本との関係も明らかにされていない⁽²⁾。そこで本稿では、北大本と漢牘本との本文の対応関係と両者の書写形式の相違に着目して、北大本の分章復原を試み、北大本と二十章本との関係について考察を加えてみたい⁽³⁾。

* 島根大学学術研究院教育学系

一、北大本分章復原の前提となる二つの仮説

はじめに北大本の分章復原の前提となる二つの仮説を提示する。

一つめは本文に関する仮説である。筆者は前稿において北大本と漢牘本との本文の対応関係について検討を加えた⁽⁴⁾。その結果を踏まえて、仮説1が提起される。

仮説1：北大本と漢牘本との本文は、最終章の末部を除いて、相互に対応関係をもつ。

二つめは北大本の章字数に関する仮説である。北大本には章字数を記した章末簡が十枚残存する。これらを字数の順（少→多）に整理すると、[表1]のごとく「百四」字（26句）から「百五十二」字（38句）までの8字（2句）単位の七つの字数からなることが知られる。

さらに後述のごとく、漢牘本との対応から知られる他の六つの章の章字数も、このいずれかに該当することから⁽⁵⁾、北大本の各章は偶数句（8字単位）からなり、100字以上160字未満の範囲に収まるように設定されたと見なされる。これにより仮説2が提起される。

仮説2：北大本の章字数は、「百四」、「百一十二」、「百廿」、「百廿八」、「百卅六」、「百卅四」、「百五十二」の七つのいずれかに該当する。

[表1] 北大本章字数一覧表

章字数	句数	竹簡番号
百四	26	簡58
百一十二	28	簡37
百廿	30	簡72
百廿八	32	簡26、簡31、簡77
百卅六	34	簡52
百卅四	36	簡45
百五十二	38	簡7、簡67

ところで、漢牘本の残存字数はおよそ2200字であり、五十五章本の総字数3300字のおよそ67パーセントにあたる。一方、北大本の残存字数はおよそ1300字であり、前稿で推定した総字数3288字にもとづけば⁽⁶⁾、全体のおよそ40パーセントにとどまる。即ち、先に提起した二つの仮説は、きわめて限定された範囲の分析から導かれたものであり、検討にあたっては、まずこの点への十分な配慮が必要となる。

その際、とくに重視されるのは、現存本文にもとづく個別の検討の結果が、その前後の句や章と整合するか否かという点である。本稿におけるすべての検討結果が、最終的に『蒼頡篇』全篇において矛盾をきたすことなく完全に整合するならば、先に提示した二つの仮説およびそれを前提として復原された北大本の分章は、現時点において妥当性をもつ、と見なし得るであろう。

このような意図から、すべての検討結果を反映した「北大本分章復原試案」（以下「試案」）を作成し、本稿の末尾に掲げた。この「試案」のテキストは、漢牘本（五十五章本）の分章に従い、漢牘本に北大本の本文を組み込んだもので、北大本の本文には下線と竹簡番号（算用数字）を付し、北大本の分章を以下の記号によって表示した（詳細については「試案」凡例参照）。

《 》…… 北大本に残存する十一の章題（章の冒頭二字）にあたる本文。

〈 〉…… 本稿の検討により推定される北大本の章題にあたる本文。

【 】…… 北大本に残存する十の章末尾の章字数。

【 】…… 本稿の検討により推定される北大本の章末尾の章字数。

以下では必要に応じて「試案」から関連部分を挙げるが、個別の検討結果が『蒼頡篇』全篇においてどのように整合するかについては、適宜「試案」をご参照いただきたい。

二、北大本と「蒼頡」「爰歴」「博学」三篇との関係

それでは復原作業に入ろう。まず本章では、各章の個別の検討のための枠組みとして、北大本と「蒼頡」「爰歴」「博学」三篇との関係について検討を加える。北大本は、章題の形式や避諱字などから秦本の様相をとどめるテキストであろうと推測されているが⁽⁷⁾、「蒼頡」「爰歴」「博学」の区切れにあたる部分の竹簡が缺失するため、三篇との関係を実証的に裏付けるには至っていない。

行論の便宜上、「博学」との関係から見ていく。「試案」から関連部分を挙げる。

第卅三

駢馳駢馳、駢□□駢。□□□□、□□□□。□□□□、

菽苜腹□。【百廿八】〈博学〉深惟、蠢愚□□。□□□□、□□□□。
積德榮比、寔⁷□貞潔。聖察□□、□□□□。□□□□、

第卅四

靜脈慧竄。遇憲蕃蠡、歛株同羸。翻扁循院、闕關關局。
增增專斯、⁷³ 粲齋宏程。□室宵隕、父媪媯甥。帶傷蔑女、
嫚捷隗丁。謬疑齟圉、表緜糾紛。律丸宄戍、關踐蠹朽。

第卅五（漢牘本缺）

戡爇熱楮、⁷¹ 蕪火燭熒。姍媼窺鬢、慝嫠嫖姪。樊厭姬秩、
私鬻救醒。【百廿】⁷² 《鷓鴣》牝牡、雄雌俱鳴。屈寵趨急、邁徒覺驚。
狎溲倭繚、⁶⁸ 頗科樹莖。禪糈姪娣、段藉合冥。蹠企瘡散、

第卅六

賴狃播耕。⁶⁹ 嬰顛娑嬾、媼媿眇靖。姑紫媼賸、訐焚竄竈。
罪蟲訟卻、⁷⁰ 連患□刑。葦鋼韃韜、紐縵紛紜。療□札和、
接結屋轆。均□垂缶、釜甕瓶營。睜賊跽□、和和□精。

注目されるのは、第卅五章（漢牘本缺）の中の本文に対応する北大本簡 72 の末尾に【百廿】の章字数が見えることである。これを逆算することによって、該章は「博学深惟」句から始まる〈博学〉章であり、北大本では「博学」の区分と分章位置とが合致していたことが明らかとなる。

続いて「爰歴」の検討に移る。同様に「試案」から関連部分を挙げる。

第十九

伊雒涇渭、⁵⁷ 維楫船方。【百四】⁵⁸ 《雲雨》霽零、霰露霏霜。朔時日月、
星晨紀綱。冬寒夏暑、⁵⁹ 玄氣陰陽。杲旭宿尾、奎婁軫亢。
弘競翦眉、霸豎傳庚。⁶⁰ 崑巒岑崩、阮崑陀阮。阿尉馭瑣、

第廿（原积第一〇）

漆鹵氏羌。贅拾鈇鎔、⁶¹ 鑄冶容鑲。顛視獻豎、偃量運糧。
攻穿檐魯、壘鄣墜京。⁶² 咸地斥鏡、盡薄四荒。鄧鎬林禁、
驅馳跌踢。貳曲順⁷□译、緒業未央。【百四】〈爰歴〉次馳、繼續前〔圖〕。

第廿一（原积第一一甲）

輔塵顛頭、較儋閼屠。暉頌緊均、侈憲迎夸。搗躄□□、
頓骸醜夫。韻寧重最、鉗訛董豬。拊菴龐顏、啖皎嚙暮。
虞豪馳蹶、齡鼠即且。購項猗積、虔越贊拏。頰虜□□、

第廿二（漢牘本缺：原积第一八甲または原积第四〇（乙）が該当する可能性あり）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。【百廿八】

第廿三（原积第四三乙）

〈窳窳〉穴竅、汜漉泥塗。霏霏潰漏、水涼漉□。□□〔□□〕、
□□□渠。墳壤執下、淫淖漸洳。楛楛榆挾、摺□〔□□〕。
柳櫟檀柘、枉橈杖杖。瓦蓋焚榜、晉漉輓杆。端直準繩、³⁴

第廿四（原积失序号第一）

□□□□。□□□□、其虎薦蔭。□□□□、徇□軛□。
莎荔蔓蔓、蓬蒿兼葭。薇薛菝蔓、蘊藜薊茶。齊芥菜荏、²⁴
茱臯蓼蕪。果苾茄蓮、菜栗瓠瓜。堅穀搯緊、饒飽糞餘。²⁵

第廿五（原积第八）

胥齋尼院、餓餓餽餽。【百廿八】²⁶ 《幣帛》羞獻、請謁任辜。禮節揖讓、
送客興居。韃離鳶雉、²⁷ 雉兔鳥鳥。雉離芸卵、赫莖蕪蒞。
貌獯齟穀、猛詢詭狐。²⁸ 蛟龍虫蛇、鼉鼉龍魚。陷阱鐸釣、

第廿六

罾笱罟罟。毛鮎殼殼、²⁹ 收繳縈紆。汁洎流敗、蠹臭腑胆。
貪欲資貨、羨溢歧昉。³⁰ 詩語報齋、敢告可于。聞此云主、
而乃之於。縱舍提挈、攜空抵扞。拘取佰拊、牽引汲刺。

まず注目されるのは、漢牘本第十九章の中の本文に対応する北大本簡 59 の「雲雨貫零」句が《雲雨》章の冒頭にあたることである。ただし《雲雨》章の末尾がどの句であるかは知られない。次に注目されるのは、漢牘本第廿五（原積第八）章の中の本文に対応する北大本簡 26 の末尾に【百廿八】の章字数が見えることである。これを逆算することによって、該章は「室竅穴竇」句から始まる〈室竅〉章であることが知られ、《雲雨》章から〈室竅〉章の前までの字数は 232 字となる。

そこで《雲雨》章の次の章を、漢牘本第廿（原積第一〇）章の第十四句「爰歴次馳」から始まる〈爰歴〉章と仮定すると、《雲雨》章の字数は 104 字、〈爰歴〉章の字数は 128 字となり、仮説 2 に適合する。この間に想定される章字数の組み合わせは、他にも 128-104、112-120、120-112 の三つがあるが、これらに従うべき根拠は見いだされず、先の「博学」との関係が踏まえれば、「爰歴」についても分章位置が合致していた蓋然性はきわめて高いと見なし得る。

以上の検討により、北大本には冒頭の〈蒼頡〉章に加えて〈爰歴〉章、〈博学〉章が存在し、北大本は全体的な枠組みにおいて三篇の区分に従うことを明らかにした。以下ではこれらの区分に従い、「蒼頡」「爰歴」「博学」の順に分章の復原を試みる。

三、「蒼頡」の分章復原

漢牘本では、第一章第一句から第廿章第十三句までの 1192 字（298 句）が「蒼頡」に対応する。はじめに検討の結果をまとめて [表 2] に示す。

[表 2] 「蒼頡」の分章

No.	章 題	章字数	北大本	漢牘本
1	〈蒼頡〉	【百廿】	缺	第一章第一句～第二章第十五句
2	《賞祿》	【百五十】	缺一簡 1～簡 7	第三章第一句～第五章第八句
3	《漢兼》	不明	簡 8～簡 11～缺	第五章第九句～不明
4	不明	不明	缺	不明
5	不明	不明	缺～簡 65—缺	不明～第十章第十五句
6	《顛頊》	【百卅六】	簡 46～簡 52	第十一章第一句～第十三章第四句
7	《室宇》	不明	簡 53～簡 55～缺	第十三章第五句～不明
8	不明	不明	缺	不明～第十七章第六句
9	《口輪》	【百四】	缺一簡 63—簡 64—簡 56～簡 58	第十七章第七句～第十九章第二句
10	《雲雨》	【百四】	簡 59～簡 62—缺	第十九章第三句～第廿章第十三句

「蒼頡」冒頭の 1 〈蒼頡〉章は次の 2 《賞祿》章との関係から、末尾の 10 《雲雨》章は前述した「爰歴」冒頭の 1 〈爰歴〉章との関係から、それぞれの章字数が判明する。一方、3 《漢兼》章から 6 《顛頊》章の前までと 7 《室宇》章から 9 《口輪》章の前までとの二箇所における分章の位置や章字数は、本文の缺失により明らかにし得ない。ただし、この二箇所にそれぞれいくつの章が存在したかについては、以下のごとく推定される。

まず 3 《漢兼》章から 6 《顛頊》章の前までを見ると、漢牘本との対応から、その間の字数は 328 字となる。これにもとづき、仮設した章の個数における一章あたりの平均字数を算出すると、以下のようになる。

- ① 二つの章が存在した場合……一章あたり平均 164 字 ($328 \div 2 = 164$)
- ② 三つの章が存在した場合……一章あたり平均およそ 109 字 ($328 \div 3 = 109.3$)
- ③ 四つの章が存在した場合……一章あたり平均 82 字 ($328 \div 4 = 82$)

これらのうち仮説 2 に適合するのは②であり、《漢兼》章から《顛頊》章の前までには《漢兼》章を含めて三つの章が存在したと推定される。

次に 7 《室宇》章から 9 《口輪》章の前までを見ると、漢牘本との対応から、その間の字数は 248 字となる。同様に仮設した章の個数における一章あたりの平均字数を算出すると、以下のようになる。

- ① 二つの章が存在した場合……一章あたり平均 124 字 (248÷2=124)
- ② 三つの章が存在した場合……一章あたり平均およそ 83 字 (248÷3=82.7)

これらのうち仮説 2 に適合するのは①であり、《室宇》章から《口輪》章の前までには、《室宇》章を含めて二つの章が存在したと推定される。

以上の検討により、No.4、5、8 に該当する章の冒頭位置は知られないものの、北大本の「蒼頡」は全十章で構成されたことが明らかとなる。

四、「爰歴」の分章復原

漢牘本では、第廿章第十四句から第卅三章第六句までの 752 字 (188 句) が「爰歴」に対応する。はじめに検討の結果をまとめて [表 3] に示す。

[表 3] 「爰歴」の分章

No.	章 題	章字数	北大本	漢牘本
1	〈爰歴〉	【百廿八】	缺	第廿章第十四句～第廿二章第十五句
2	〈室竅〉	【百廿八】	缺～簡 34—缺一簡 24～簡 26	第廿三章第一句～第廿五章第二句
3	《幣帛》	【百廿八】	簡 27～簡 30～缺	第廿五章第三句～第廿七章第四句
4	不明	【百廿八】	缺～簡 31	第廿七章第五句～第廿九章第六句
5	《拓悝》	【百一十二】	缺一簡 32—簡 33—簡 35～簡 37	第廿九章第七句～第卅一章第四句
6	〈機杼〉	【百廿八】	缺	第卅一章第五句～第卅三章第六句

「爰歴」冒頭の 1 〈爰歴〉章は次の 2 〈室竅〉章との関係から、末尾の 6 〈機杼〉章は前述した「博学」冒頭の 1 〈博学〉章との関係から、それぞれの章字数が判明する。また 3 《幣帛》章の次の章 (No.4) については、漢牘本との対応から北大本簡 31 が該章の末尾にあたるのが知られ、そこに見える章字数【百廿八】を逆算することによって、冒頭句は漢牘本の第廿七章第五句 (本文缺失) にあたり、その前の 3 《幣帛》章の字数は 128 字であることが判明する。なお北大本では缺失により「口悝」とされていた 5 《拓悝》章の章題については、漢牘本との対読を踏まえた敢告可于氏の推定に従う⁽⁸⁾。

以上の検討により、北大本の「爰歴」は全六章で構成されたことが明らかとなる。

ここで、前稿で取り上げた「爰歴」中の章の末尾簡と推定される北大本簡 78+簡 77 について補足しておきたい⁽⁹⁾。まず積文を示す⁽¹⁰⁾。

・北大本簡 78+簡 77

𠄎𠄎𠄎𠄎、□□𠄎𠄎。 百廿八

北大本簡 78+簡 77 は、漢牘本に対応する本文が見えず、前稿では漢牘本の未見の板あるいは未積部分に属する蓋然性が高いことを指摘した。先の復原によれば「爰歴」中において章字数が「百廿八」でかつ章末の二句の本文が不明の章は、〈爰歴〉章、《幣帛》章の二つであり、簡 78+簡 77 はこれらのいずれかに該当すると考えられる。

五、「博学」の分章復原

漢牘本では、第卅三章第七句から第五十五章第十二句までの 1344 字 (336 句) が「博学」に対応する⁽¹¹⁾。はじめに検討の結果をまとめて [表 4] に示す。

[表 4] 「博学」の分章

No.	章 題	章字数	北大本	漢牘本
1	〈博学〉	【百廿】	缺～簡 73—缺一簡 71—簡 72	第卅三章第七句～第卅五章第六句

2	《鷓雉》	【百廿】	簡 68～簡 70～缺	第卅五章第七句～第卅七章第六句
3	〈台怡〉	【百五十二】	缺～簡 76—缺一簡 66+22+23—缺一簡 67	第卅七章第七句～第卅九章第十四句
4	《齋購》	【百五十二】	簡 42—簡 43～缺	第卅九章第十五句～第卅二章第七句
5	不明	【百卅六】	缺～簡 39—缺一簡 38—簡 40—簡 41—缺	第卅二章第八句～第卅四章第十一句
6	〈佗口〉	【百卅四】	缺～簡 44—簡 45	第卅四章第十二句～第卅七章第二句
7	《閻錯》	【百一十二】	簡 12—簡 13～缺	第卅七章第三句～第卅八章第十五句
8	〈贖黠〉	【百五十二】	缺～簡 16～簡 18～缺	第卅九章第一句～第五十一章第八句
9	〈湏函〉	【百卅六】	缺～簡 14—簡 15—簡 20—簡 21—缺	第五十一章第九句～第五十三章第十二句
10	〈鮑口〉	【百廿】	缺～簡 19～缺	第五十三章第十三句～第五十五章第十二句

「博学」冒頭の 1 〈博学〉章については、前述のごとく漢牘本との対応により【百廿】の章字数をもつ北大本簡 72 が該章の末尾簡であることが知られる。同様に【百五十二】の章字数をもつ北大本簡 67 が 2 《鷓雉》章の次の章 (No.3) の末尾簡にあたるのが知られ、章字数を逆算することによって該章が「台怡昏晦」句から始まる 3 〈台怡〉章であり、2 《鷓雉》章の字数は 120 字であることが判明する。

次に 4 《齋購》章から 6 〈佗口〉章までを見ると、まず北大本簡 45 が 7 《閻錯》章の前の章 (No.6) の末尾簡にあたるのが知られ、そこに記された章字数【百卅四】を逆算することによって、該章が「佗口奏斬」句から始まる 6 〈佗口〉章であることが判明する。さらに、漢牘本と〈佗口〉章の前の章 (No.5) に属する北大本簡 39—缺一簡 38—簡 40—簡 41 との対応関係から、該章 (No.5) の末尾簡は「媵媵姚滄」句から「裂口今是」句までの 16 字であることが知られる。仮説 2 に挙げた七つの章字数のうち、末尾簡が 16 字となるのは、136 字の場合に限られることから、該章 (No.5) の字数は 136 字であり、これを逆算することによって冒頭句は漢牘本の第卅二章第八句 (本文缺失) にあたり、その前の 4 《齋購》章の字数は 152 字であることが判明する。

続いて 7 《閻錯》章から篇末の 10 〈鮑口〉章までを見ると、以下に挙げる「試案」第卅七～第五十五に示すごとく、A～D の四つの対応本文が認められる。これらについて、北大本の一簡 20 字に対応する本文が漢牘本の各行 20 字のどこに位置するか、という点に注目して整理すると [表 5] のようになる。

第卅七

媵媵蒙期、⁴⁴ 未旬繇氏。【百卅四】⁴⁵ A 《閻錯》楚葆、楚據趙等。祝虺陽闐、
鈴鑿閏悝。騁虧効杓、¹² 道津郢鄙。祁樹鐔幅、芒隰偏有。
泫云孌姪、髻弗經泉。¹³ 𠄎𠄎𠄎𠄎、𠄎𠄎𠄎𠄎。𠄎𠄎𠄎[舉]、

第卅八

厭巧殘紀。濕鞞翽職、裝製盡止。潰綦鬻蹠、屏誣訶駭。
隆蝸翳鷓、底稷蟬母。啓夕胜朐、澡漱竭起。逆獨降門、
椅躡攀口。惶愠忘罵、詰誅鎗士。剖判稍辨、𠄎映𠄎𠄎。【百一十二】

第卅九

〈贖黠〉黴膾、狂獫狻狻。嬋婢纂積、胸姘嬾癖。嬾駘他脫、
厓眈段口。袒屑稚權、強寄倚留。菝莽藍蒔、芑杞莠茅。
B 猜常袞士、橘繇莢苞。塵埃票風、髻鬢寡擾。髻歎媵媵、¹⁶

第五十

媵媵肥塵。帔棧裘褐、髻屨幣袍。鵠決母愁、焦𠄎𠄎𠄎。¹⁷
𠄎𠄎𠄎𠄎、𠄎𠄎𠄎𠄎。弄數券契、筆研筆籌。籍寢訂齋、¹⁸
陸犴監牢。沈滌染漚、井湛口浮。緊拔攢厥、牒𠄎𠄎𠄎。

第五十一

蕤葍領脰、舌脣題頰。匈脅指梅、腳脚睢尻。少唯迺肯、
 掎投設辜。毀沒共涿、殄泛敵仇。〔百五十二〕〈湏函〉澤濮、鄆邶鄧邨。
 祿闈媼媿、刪裨具曹。謔對探徵、減把操抱。訶曉孱意、

第五十二

鱗鯢詣綬。完矜鬣代、究輿傀口。C 鴟煦宵閣、冷竈遇包。
 穗稍苦媿、挾貯施衷。狄署賦實、¹⁴ 狃驚駭警。贛害輟感、
 甄穀燔窰。秣秣麻苔、鑿藜鞣槽。¹⁵ 飢獸然稀、丈表牒膠。

第五十三（原积第五三甲）

竊鮒鱗鱗、鱣鮪鯉鯉。慘怵鞣鞣、²⁰ 玢整荇羔。冤暑暖通、
 坐響護求。蓼閭堪況、燎灼煎炮。²¹ 快狡息寐、夢寐□□。
 詢診辱耽、亶擅隱傍。〔百卅六〕〈鮑口〉淫回、雷廉難條。惡蘭馭口、

第五十四（原积第二四）

蕤秦殆道。向催騶撒、摩剝刷儵。汨睇齟蝕、胗囂忍口。
 俗僮舛姦、悵痕炕蕙。D 騰籥陞沙、遮遮查詢。鑠鏈繫總、
 納輶戀囊。葬墳髣髴、¹⁹ 皚井始牟。繪綵燥紺、□□□□。

第五十五（原积第五三乙） { } 加増推定部分

緇纒紅綃、練縷素繆。蹇鑠腰釧、帷募虛毀。弦鞞鞞甃、
 皮韋革鞣。屬廢剌謀、縱聒旋保。穀鞣斷犛、擣扶鞞陶。
 令次睢徧、盡得所求。〔百廿〕{延年益壽、上下敖游。兼吞天下、}

〔表 5〕漢牘本と北大本との対応状況

本文	北大本	漢牘本	北大本一簡二十字の対応位置
A	簡 12—簡 13	第卅七章第三句～第十二句	漢牘本第三句から次行第二句に対応
B	簡 16—簡 17—簡 18	第卅九章第十一句～第五十章第十句	漢牘本第一句から第五句に対応
C	簡 14—簡 15—簡 20—簡 21	第五十二章第四句～第五十三章第八句	漢牘本第四句から次行第三句に対応
D	簡 19	第五十四章第八句～第十二句	漢牘本第三句から次行第二句に対応

A、B、C、Dは、それぞれ漢牘本との対応位置がその前の本文（例えばBの場合はA）と異なることから、北大本において異なる章に属することが知られる。北大本は各章の冒頭の二字を章題とし、各章の第一簡・第二簡の上端部にそれぞれ章題の第一字・第二字を標記する形式をもつが、A、B、C、Dのうち、Bの冒頭の簡 16、Cの冒頭の簡 14 およびDの簡 19 の簡首にはいずれも章題が見えないことから、それぞれの簡の前部（直前とは限らない）には、簡首に章題をもつ二簡が存在したはずであり、少なくとも各簡の前に位置する二簡分の本文 40 字が同じ章に属することは確実である。これによりB、C、Dが属する三つの章の分章位置と字数は、以下のごとく推定される。

まずBでは、簡 16 の前の二簡分にあたる「贖黠微論」から「芭杞蕪茅」までの 40 字は確実に同じ章の本文に属する。そこで仮に「贖黠微論」が章の冒頭句であったとすると、その前の 7《閼錯》章の字数は 112 字となり、仮説 2 に適合する。一方、簡 16 の前に章題をもつ二簡を含む合計四簡が存在し⁽¹²⁾、「隆蝸翳鷓」から「芭杞蕪茅」までの 80 字を同じ章の本文と仮定すると、その前の 7《閼錯》章の字数は 72 字となり、仮説 2 の最少字数 104 字を下まわるため、この想定は成り立たない。従って 7《閼錯》章の字数は 112 字で、その後には「贖黠微論」句から始まる 8《贖黠》章が続いていたと推定される。

行論の便宜上、次にDを検討する。Dでは、簡 19 の前の二簡分にあたる「鮑口淫回」から「悵痕炕蕙」までの 40 字は確実に同じ章に属する。一方、簡 19 の前に章題をもつ二簡を含む合計四簡が存在し、「慘怵鞣鞣」から「悵痕炕蕙」までの 80 字を同じ章の本文と仮定すると、Cに属する簡 20 の第五句および簡 21 の第一句から第五句までと重複するため、この想定は成り立たない。従ってDが属する「博学」の最終章は「鮑口淫回」句から始まる 10《鮑口》章で字数は 120 字、その前の章 (No.9) の末尾句は「亶擅隱傍」と推定される。

最後にCでは、簡 14 の前の二簡分にあたる「湏函澤濮」から「究輿傀口」までの 40 字 (10 句) は確実に同じ章に属する。そこで仮に「湏函澤濮」が章の冒頭句であったとすると、その前の 8《贖黠》章の字数は 152 字、該章 (No.9) の字数は 136 字となり、いずれも仮説 2 に適合する。一方、簡 14 の前に章題をもつ二簡を含む合計四簡が存在し、「繫拔

横廠から「究奥傀口」までの80字を同じ章の本文と仮定すると、その前の8〈黠黠〉章の字数は112字で仮説2に適合するが、該章(No.9)の字数は176字となり、仮説2の最多字数152字を上まわるため、この想定は成り立たない。従ってCが属する章は、「湏函澤濮」句から始まる9〈湏函〉章で字数は136字、その前の8〈黠黠〉章の字数は152字と推定される。

以上の検討により、北大本の「博学」は全十章で構成されたことが明らかとなる。

六、北大本と『漢志』二十章本との関係

それでは北大本と『漢志』が記す二十章本との関係について考察を加えよう。

前章までの復原に従えば、北大本は「蒼頡」十章、「爰歴」六章、「博学」十章の合計二十六章からなるテキストであったと推測される。[表6]に示すごとく、章数のみを単純に比較すれば、北大本は二十章本の「蒼頡」七章と「博学」七章にそれぞれ三章を加えたテキストと見なされ、『蒼頡篇』の本文(章)の漢代における増修は、すでに閻里書師の五十五章本以前に行なわれていたことになる。

[表6]『漢志』二十章本・北大本の章数

テキスト	「蒼頡」	「爰歴」	「博学」	合計
『漢志』二十章本	七	六	七	二十
北大本	十	六	十	二十六

ただし両者を比較して少しく疑問に思われるのは、三篇のうちの「爰歴」のみが二十章本の「六章」と合致し、数値は異なるものの「蒼頡」「博学」が二十章本と同様に同数となっていることである。そもそも北大本は二十章本にもとづくテキストであり、両者の間に何らかの共通性が認められることは当然の現象とも言えるが、「爰歴」のみ合致して「蒼頡」「博学」がともに三章の増修となるのは、いささか不自然ではないだろうか。

ここで想起されるのは、前漢期の筆記資料において「十」と「七」との字形が近似する例が多見されることである。こうした状況を踏まえれば、『漢志』が伝える「蒼頡七章」「博学七章」の「七」は「十」の誤写にかかり、秦本はもともと北大本と同様の合計二十六章からなるテキストであった可能性が指摘される⁽¹³⁾。

もとよりこの誤写説は、北大本と二十章本との章数の比較から導き出された推測にすぎず、それを裏付ける直接的な証拠が存在するわけではない。しかし「爰歴」の章数が「六」であったことが「蒼頡」「博学」の「十」を「七」に誤る誘因となり、さらに漢代に入って「蒼頡」「爰歴」「博学」の枠組みを解体した五十五章本が流布し、三篇の章数に関する情報が急速に失われたことが、誤伝の定着につながったとすれば、必ずしも無稽の妄説とは言えまい。そしてこの可能性に立脚すれば、秦本と漢代の諸本との関係は、以下の二点にまとめることができる。

- (一) 五十五章本以前の漢代のテキストは、「蒼頡」「爰歴」「博学」三篇の章立てなど、秦本の構造をそのまま踏襲し、内容面においても、秦本の本文に対して漢朝下で『蒼頡篇』を用いる際に支障をきたす王朝名や避諱字などに、最小限の変更を施したものであった。
- (二) 一方、閻里書師による五十五章本は、「蒼頡」「爰歴」「博学」の区分を解体して全体を一章六十字に統一し「蒼頡篇」と総称するなど、構造面においては大がかりな改編を加えたが、内容面では最終章の字数を六十字に調整するための加増にとどまり⁽¹⁴⁾、基本的にそれ以前の本文を継承したものであった。

結 語

以上、本稿では北大本と漢牘本との本文の対応関係と両者の書写形式の相違に着目して、北大本の分章復原を試み、北大本と二十章本との関係について、新たな見解を提起した。

「試案」に示したごとく、個別の検討結果は、「蒼頡」「爰歴」「博学」の各篇内、さらに『蒼頡篇』全篇においても矛盾なく整合することから、本稿における北大本の分章復原は、現時点において妥当性をもつと見なすことができよう。今後は内容面からの検討が課題となるが、特に漢牘本の釈読については、資料上の制約から困難な問題が多く、すでに先学によって進められている北大本をはじめとする漢簡諸本との詳細な対読とともに、章の構成や句式・押韻などの形式面からの分析が重視される。そうした点においても、本稿で提起した北大本の分章復原は、一定の意義を有すると考えられる。

注

- (1) 拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」(『島根大学教育学部紀要』第54巻(人文・社会科学)、2021年2月、第41～50頁、<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/52534>)。その後、若干の修正を加えて、中文版(白雨田訳)「《蒼頡篇》の押韻与章序」(『簡牘学研究』第十一輯、甘肅人民出版社、2021年12月、第166～182頁)を発表した。

- (2) たとえば北大本の整理者の朱鳳瀚氏は、「北大藏漢簡《蒼頡篇》已知的每章字數均在百字以上，自然不可能是上述漢閩里書師所改編之五十五章每章六十字的本子。至於是否與班固在《漢書・藝文志》著録的皇家藏書中之二十章本子相同，因爲北大簡本的章數尚不能確知，故此點亦未可確知。上述情況也說明在西漢時期，改造自秦代的《蒼頡篇》、《爰歷篇》、《博學篇》而成的《蒼頡篇》文本，在當時似非僅有一兩種」と述べ、北大本が二十章本であるか否かについては、全体の章数が知られないため明確にできない、とした上で、秦代の「蒼頡」「爰歷」「博學」を改造して成る西漢期の『蒼頡篇』テキストは、この一・二種だけではなかったようだとの見解を示している（朱鳳瀚「北大藏漢簡《蒼頡篇》的新啓示」（北京大学出土文献研究所編（朱鳳瀚編撰）『北京大学藏西漢竹書〔壹〕』上海古籍出版社、2015年、第173頁）。
- (3) 本稿における北大本の検討は、北京大学出土文献研究所編（朱鳳瀚編撰）『北京大学藏西漢竹書〔壹〕』上海古籍出版社、2015年（以下、『北大壹』と略記）にもとづき、『北大壹』以後に発表された積文の補訂については、劉婉玲『出土《蒼頡篇》文本整理及字表 上編』（吉林大学碩士學位論文（指導教師：馮勝君教授）、2018年5月）を参照した。なお劉氏の學位論文の閲読にあたって、崎川隆教授（吉林大学古籍研究所）よりご高配を賜った。記して感謝の意を表す。また漢牘本の検討は、劉桓編著『新見漢牘《蒼頡篇》《史篇》校積』（中華書局、2019年（以下、『校積』と略記）にもとづき、章序については『校積』に修正を加えた拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注1）、拙稿「北京大学藏漢簡漢牘『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（『中国研究集刊』第六十八号、2022年8月、第67～79頁、<https://www.chugoku-kenkyu-shukan.org/wp/wp-content/uploads/2022/07/68-67-80fukuda.pdf>）に従う。
- (4) 拙稿「北京大学藏漢簡漢牘『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（前掲注3）。
- (5) 具体的には、〈蒼頡〉章120字、〈雲雨〉章104字、〈爰歷〉章128字、〈幣帛〉章128字、〈機杼〉章128字、〈鷓鴣〉章120字の六章である。
- (6) 拙稿「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（前掲注3）参照。
- (7) 朱鳳瀚「北大藏漢簡《蒼頡篇》的新啓示」（前掲注2、第176頁）。
- (8) 敢告可于「漢牘《蒼頡篇》考積、対読与章序研究」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020年8月16日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4616>）。
- (9) 拙稿「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（前掲注3）参照。
- (10) 簡78+簡77の綴合および缺字「𠄎」の補積は、陸希馮「關於《北京大学藏西漢竹書〔壹〕》積文注釋的幾點意見」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2015年11月17日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/2638>）に従う。また、末尾の缺字「𠄎」の補積は、王先虎「北大藏西漢竹書《蒼頡篇》七七号殘簡試補」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020年8月14日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4613>）に従う。
- (11) 『蒼頡篇』最終章の北大本と漢牘本との対応関係については、拙稿「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（前掲注3）参照。
- (12) 念のために補足すれば、章の冒頭は第二句が韻を踏む関係から、この場合「合計三簡」は想定し得ない。
- (13) 拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注1）において指摘したごとく、「蒼頡」「爰歷」「博學」三篇の押韻は、それぞれ特定の韻部に属する。こうした状況は、三篇が順次増補されて成立したものではなく、当初から計画的に編纂されたことを物語っており、各篇の分章も一定の意図にもとづくものであったと考えられる。
- (14) 五十五章本最終章の本文の加増については、拙稿「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（前掲注3）参照。

北大本分章復原試案

凡 例

1. 北大本分章復原試案に掲げたテキストは、漢牘本の分章に従い、漢牘本に北大本の本文を組み込んだもので、北大本の本文には下線と竹簡編号（算用数字）を付した。
2. 北大本の本文は、北京大学出土文献研究所編『北京大学藏西漢竹書〔壹〕』（朱鳳瀚編撰、上海古籍出版社、2015年）の積文（以下、北大本原積）にもとづき、諸家の見解により補訂を加えた。北大本原積以後に発表された先学の研究にもとづく積文の補訂は、劉婉玲『出土《蒼頡篇》文本整理及字表 上編』（吉林大学碩士學位論文、指導教師：馮勝君教授、2018年5月）に従い、すでに本書に引用されている先行研究については、注記を省略した。
3. 漢牘本の本文は、劉桓編著『新見漢牘《蒼頡篇》《史篇》校積』（中華書局、2019年）の積文（以下、漢牘本原積）にもとづき、諸家の見解および私見により補訂を加えた。『校積』所収の図版によれば、漢牘本には板上の字迹が薄れて形体を把握しがたいものが数多く見られ、補訂を加えた文字以外にもなお検討を要する文字が少なからず認められるが、これらについては今後の課題とし、しばらく原積に従った。

4. 補訂を加えた文字には○で囲んだ通し番号を付し、「校記」および「引用文献目録」を末尾に記した。
5. 本文の字体は必ずしも厳密な隸定ではなく、便宜的に通行体に従う場合がある。また、句や章の構造を簡明に示すために、漢牘本原積に（ ）で示された補積字はすべて省略した。
6. 漢牘本の章序は、先に筆者が提起した修正に従い、原積と異なる場合は、章号の下に原積の章序を（ ）で示した。
7. 本文中の記号は、基本的に北大本原積および漢牘本原積を踏襲し、北大本の分章を以下の記号によって示した。
 - 《 》……北大本に残存する十一の章題(章の冒頭二字)にあたる本文。
 - 〈 〉……本稿の検討により推定される北大本の章題(章の冒頭二字)にあたる本文。
 - 【 】……北大本に残存する十の章末尾の章字数。
 - 〔 〕……本稿の検討により推定される章末尾の章字数。章末の位置は明らかであるものの章字数が不明である場合は【章字数不明】とした。

本 文

第一

〈蒼頡〉作書、以教後嗣。幼子承詔、謹慎敬〔戒〕。〔勉〕〔力〕〔諷〕〔誦〕、
晝夜勿置。苟務成史、計會辯治。超等軼〔羣〕、〔出〕〔尤〕〔別〕〔異〕。
初雖勞苦、卒必有憲。設願忠信、微密瘞塞。〔儼〕〔佞〕□□、

第二（原積『史篇』一第二）

獨中上意。臨官使衆、恭肅畏事。終身毋忘、安樂貴富。
詹彼卑賤、固繇無能。馴道至矣、諸産皆備。人名元媿、
師用爲侶。百蟲草木、兵^①甲器械。禽獸虎兕、雜物奇恢^②。【百廿】

第三

《賞祿》賢智、賜予分貸。莊犯耆強、朋友過克。高囂平夷、
寬惠善志。桀紂迷惑、宗幽不識。取穀肆宜、益就獲得。¹
賓勸向尚、馮奕青北。係孫褒俗、貌鬻吉忌。瘰癧癰瘰、²

第四

痰痛漱效。毒藥醫工、抑按啟久。嬰但指援、何竭負戴。³
谿谷阪險、丘陵故舊。長緩肆延、渙奐若思。勇猛剛毅、⁴
便走巧亟。景桓昭穆、豐盈爨熾。媿蒼蝟黑、媿媿款餌。⁵

第五

戲叢奢掩、顛顛重該。悉起臣僕、發傳約載。趣遽觀望、⁶
行步駕服。逋逃隱匿、往來眇眇。【百五十二】⁷《漢兼》天下、海內并廂。
胡無噍類、菹醢離異。戎翟給實、⁸百越貢織。飭端脩灑、

第六

變大制裁。男女蕃殖、六畜逐字。⁹顛軼筋羸、散戾左右。
勢悍驕裾、誅罰賞耐。丹勝誤亂、¹⁰圍奪侵試。胡貉離絕、
豕豷棺柩。巴蜀筭竹、筐篋籛筍。¹¹厨宰櫛參、甘穀羹載。

第七

稻梁黍糜、衍麥飯食。□□□蠶、疴疴□□。□□□〔麩〕、
稗釀釋載。駟徒好美、冠帶環佩。□□□□、□□□□。
進御狎習、辭愛迥好。□□□□、□□□□。□□□□、

第八（漢牘本缺）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第九（漢牘本缺）

□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、

第十（原積第五四）

圈屬柔良。國家定度、鉗首驩康。爵仁列□、左庶上〔卿〕。
欣喜說譯、枚顯訢彭。昔晏孔墨、堯舜禹湯。頽印隸歷、
麟盼⁶⁵范喪。頤碩疑化、蚩尤典明。洋〔□〕泰[?]、豐載騷[?]□。【章字数不明】

第十一（原积第一一乙）

《顛頊》祝融、招搖奮光。顛豫録恢、徇隋愷裏。鄢鄧析鄴、⁴⁶
宛鄂鄂鄴。閔僇竈趕、膝先登慶。陳蔡宋衛、吳邗許莊。⁴⁷
建武抵觸、軍役嘉臧。貿易買販、市旅賈商。鯁展賁達、⁴⁸

第十二

游敖周章。黜壓黯黜、黜黜驗錫。黜黜赫赫、儻赤白黃。⁴⁹
殲棄臞瘦、兒孺早殤。恐懼懷歸、趨走病狂。疵疔禿瘦、⁵⁰
齟齬庚傷。毆伐痕瘡、肤肤膏盲。鞫囚束縛、論訊旤詳。⁵¹

第十三

卜筮拊占、崇在社場。寇賊盜殺、捕獄問諒。【百卅六】⁵² 《室宇》邑里、
縣鄙封疆。徑路衝術、街巷垣藩。開閉門閭、⁵³ 闕廷廟郎。
殿層屋內、窻牖戶房。桴楫棹楫、柱桁橋梁。⁵⁴ 屏囷廬廡、

第十四

亨庠陸堂。庫府廡廡、困窖廡倉。桶概參斗、⁵⁵ 升半實當。
象量錘銖、銓兩鈞衡。耳目鼻口、面頰頰頰。首頭頤頤、
肩臂股肱。肝肺心腎、脾胃腹腸。骨體^③牙齒、手足蹇□。

第十五

族姓姊妹、親戚弟兄。罷[病]悲[哀]、號[哭][死]喪。[遣]□[心][所]、
鷄豚犧^④羊。豨豨豨豨、□[江?]殺□。□□和□、□□□□。
曾瓮酌醇、脯[肉]酒漿^⑤。師□□□、□哇囀^⑥。儻備□□、

第十六

葵豆^⑦飴錫。鐘磬音聲、賴瑟琴簧。銀錫玖玎、貝琮[□□]。
璧碧圭玉、璣珠瑗璜。茵蓐席藉、杠机程牀。鞞鞞[□□]、
□鞞^⑧衣裳。婁[岐]秦蕢、[时]唯莖^⑨薊。巾幘裏虞、衷膾[□□]。

第十七（原积失序号第四）

□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。【章字数不明】《□輪》□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、餅蠶貯箱。松柏播棧、桐梓杜楊。鬱棣桃李、

第十八（原积第一八乙）

棗杏榆桑。⁶³ 藿葦菅蔽、莞蒲藺蔣。崑末根本、榮葉莠英。
麋鹿熊羆、⁶⁴ 犀犛豺狼。獾狸麋犴、麇魯麇麇。鳴鵠鳧鷹、
鳩鴉鴛鴦。⁶⁵ 陂池溝洫、淵泉隄防。江漢滄汾、河洧涇漳。

第十九

伊雒涇渭、⁶⁷ 維楫船方。【百四】⁶⁸ 《雲雨》霽零、霧露霏霜。朔時日月、
星晨紀綱。冬寒夏暑、⁶⁹ 玄氣陰陽。杲旭宿尾、奎婁軫亢。
弘競翦眉、霸暨傅庚。⁶⁰ 崑巒岑崩、阮崑陀陀。阿尉駁瑣、

第廿（原积第一〇）

漆鹵氏羌。贅拾鈇鎔、⁶¹ 鑄冶容鑲。顛視獻豎、偃鼃運糧。
攻穿檐魯、壘鄩墜京。⁶² 咸地斥鏡、盡薄四荒。鄩^⑩鎬林禁、
驅馳跌踢。貳曲順^⑪[萍]、緒業未央。【百四】〈爰歷^⑫〉次馳、繼續^⑬前[圖]。

第廿一（原积第一一甲）

輔廡顛頭、輓儋閼屠。躡頌緊均、侈憲廻夸。搖躡□□、
頓骸醜夫。韻寧^⑭重最、鉗齟董豬。拊菴龐顏、啖皎嚙暮^⑮。
虞豪馳騷、齡鼠即且。購項猗積、虔越^⑯贊拏。煩虜□□、

第廿二（漢牘本缺：原积第一八甲または原积第四〇（乙）が該当する可能性あり）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。【百廿八】

第廿三（原积第四三乙）

〈室窳〉穴竇、汜漑泥塗。霏霏潰漏、水涼^⑰漑□。□□[□□]、
□□□渠。墳壤執下、淫淖漸洳。楫檣榆枿、櫛□[□□]。
柳櫟檀柘、枉槩枝扶。瓦蓋焚榜、晉漑屺杆。端直準繩、³⁴

第廿四（原积失序号第一）

□□□□。□□□□、其虎薦蔭。□□□□、徧□輒□。
莎荔慕蔓、蓬蒿兼葭。薇薛莪蔓、藿藜薊荼。薺芥萊荏、²⁴
茱與蓼蘼。果蓏茄蓮、柔栗瓠瓜。堅穀搯縻、饒飽糞餘。²⁵

第廿五（原积第八）

脛齋尼皖、餒餓鎌舖。【百廿八】²⁶ 《幣帛》羞獻、請謁任辜。禮節揖讓、
送客興居。韃離鳶雛、²⁷ 雉兔烏鳥。雞雛芸卵、隸董蒞蒞。
貌獺齧穀、貘駒鬃狐。²⁸ 蛟龍虫蛇、鼉鼉鱉魚。陷阱鐫釣、

第廿六

置笱罟罟。毛鮪殼燿、²⁹ 收繳縈紆。汙洎流敗、蠹臭腑胆。
貪欲資貨、羨溢歧衷。³⁰ 詩語報齋、敢告可于。聞此云主、
 而乃之於。縱舍提挈、攜空抵扞。拘取佰拊、牽^⑨引汲剝。

第廿七（漢牘本缺）

□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。【百廿八】〈□□〉□□、
 □□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
 □□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、

第廿八（漢牘本缺：原积第一八甲または原积第四〇（乙）が該当する可能性あり）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
 □□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
 □□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第廿九

□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。頑柘械師、
鰥寡特孤。【百廿八】³¹ 《拓悝^⑩》軋畢、狘右媿□。獮拊蒼遣、□□□□。
 □□諱猗、賴勃醉酤。越文窳窳、差費飲酺。細小貧寡、

第卅

气勾賞捺。³² 歌潘間簡、鼙鼓歌醜。璽娶衷嫫、鄭舞炊竿。
嬰捐媿媿、³³ 媿噲菁華。姣窳娃媿、啜啜黎植。粉臙脂膏、
鏡籥比疏。³⁵ 毳髻箭械、須髻髮膚。瘴熱疥癩、瘕瘕癰疽。

第卅一

旃翳笠笠、³⁶ 羽扇聶聶。柁梗柁棘、條篲樂棹。【百一十二】³⁷ 〈機杼〉滕複、
紆綜縶縶。繭〔絲〕紉絡^⑪、布〔絮〕繫絮。雙轄輦^⑫蕩、危亡盛〔孟〕。
 槃案徙^⑬几、鏡鑄赤盧。甌算鬲鍤、銚鉤鼎壺。服^⑭唯利畫、

第卅二（漢牘本缺：原积第一八甲または原积第四〇（乙）が該当する可能性あり）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
 □□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
 □□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第卅三

駢駢駢駢、驪□□駢。□□□□、□□□□。□□□□、
 菽苕腹□。【百廿八】〈博學〉深惟、恣^⑮愚□□。□□□□、□□□□。
 積德榮比、寔^⑯□貞潔。聖察□□、□□□□。□□□□、

第卅四

靜脈慧窺^⑰。遇慮蕃蠡、歛祿同羸。翻扁循院、闕關關局。
增增專斯、⁷³ 祭齋宕程。□室宵隕、父媿媿甥。懲傷蔑女、
媿捷隕丁。聶疑醜圍、表緱糾緱。律丸宄戍、關踐蠹朽。

第卅五（漢牘本缺）

截爇熱燭、⁷¹ 蕪火燭燭。媿媿窺媿、惡媿媿媿。樊厭媿秩、
私媿救醒。【百廿】⁷² 《鷓鴣》牝牡、雄雌俱鳴。屈寵趨急、邁徒覺驚。
狎溲媿媿、⁶⁸ 頗科樹莖。禪糶媿媿、段糶合冥。蹠企媿散、

第卅六

賴犴播耕、⁶⁹ 嬰媿娑媿、媿媿眇媿。姑媿媿媿、訐媿窺媿。
罪媿訟欲、⁷⁰ 連患〔地〕刑。羞媿媿媿、紐媿紛媿。檉□札和、
 檉結屋媿。均媿垂媿、釜媿媿媿。睨媿媿□、和和□媿。

第卅七

涓滿汰濡、襦依嬪婧。倓我⁹臭伏、泄兕諄輕。錦繡續縵、
糾綸組纓。【百廿】〈台怡〉昏晦、洒缺顛餅。屈空鄰揄、輻桺輶輦。
姪啤囉^②、詒珖濁清。蠅毳涉渡、蹇孿^③萍。俯^④頂□□、

第卅八

盤孔□□。□□□□、□□罍吳。□錯鑿銅、屨豹栽⁹□。
冰滑錫血、蠶電威營。顧離和稹、鼎顛楯^⑤。蚡^⑥擊陬□、
雋^⑦階邲^⑧。76 □忌隄□、^⑨設領^⑩。橫□□勉、度□□□。

第卅九

盪虛電狎、狗獮^⑪。媼黼^⑫、斟掇^⑬營。觸聊脯^⑭、
級約^⑮。66+22+23 表裏^⑯、^⑰翰旌。漢^⑱移惑、短^⑲翼□。
何^⑳鼻既、^㉑媼^㉒。魁鉅^㉓、與^㉔。【百五十二】⁶⁷《齋^㉕》件妖、

第卅 (漢牘本缺)

羹^㉖、箸^㉗。某^㉘、⁴²。辰^㉙、⁴³。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第卅一 (漢牘本缺)

□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、

第卅二 (漢牘本缺)

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。
□□□□、□□□□。【百五十二】〈□□〉□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第卅三 (原积第四二)

銷^㉚、尋^㉛。密^㉜、讀^㉝。瘡^㉞、
膩^㉟。淺^㊱、³⁹。季^㊲、^㊳。^㊴、^㊵。
驕^㊶、^㊷。媼^㊸、^㊹。魁^㊺、^㊻。

第卅四 (原积第四三甲)

簪^㊼、⁴⁰。頰^㊽、⁴¹。
瘡^㊾、⁴¹。裂^㊿。【百卅六】〈[㋀]〉[㋁]、[㋂]。池[㋃]、[㋄]。

第卅五 (原积第三五乙)

奚[㋅]、[㋆]。茸[㋇]、[㋈]。見[㋉]、
遴[㋊]。飢[㋋]、[㋌]。郵[㋍]、[㋎]。
沐[㋏]、[㋐]。魂[㋑]、

第卅六

加[㋒]、[㋓]。詢[㋔]、[㋕]。
肘[㋖]、[㋗]。悟[㋘]、[㋙]。
候[㋚]、[㋛]。

第卅七

媼[㋜]、⁴⁴。鈐[㋝]、⁴⁵。
法[㋞]、¹³。□□□□、□□□□。□□□□〔舉〕、

第卅八

厭[㋟]、[㋠]。隆[㋡]、[㋢]。
椅[㋣]、[㋤]。【百一十二】

第卅九

〈[㋥]〉[㋦]、[㋧]。厓[㋨]、[㋩]。
猜[㋪]、¹⁶。

第五十

媼媼肥庾。帙棧裘褐、髀屨幣袍。鵠^⑭決^⑮母愁、焦讎^⑯□□。¹⁷
 齷媷齷齪、齷繞黜劬。弄數券契、筆研筭籌。籍寢訃齋、¹⁸
 陸犴監牢。沈滲染漚、井湛□浮。槩拔橫麻、牒^⑰齧^⑱□□。

第五十一

薺茹頰肫、舌脣題頰。匈脅指梅、腳^⑲腳脰尻。少唯酒肯、
 擗投殺辜^⑳。毀没共涿、殄泛敵仇。【百五十二】〈渾函〉澤漢、鄆邗鄆邗。
 祿闈媼媼、刪裨具曹。諶對探徵、滅^㉑把操抱。訶曉孱意、

第五十二

鱗鯢詣綬。完矜曼代、究與傀□^㉒。鴟煦宵閑、冷竈退包。
 穗稍苦媿、挾貯施衷。狄署賦實、¹⁴ 狃驚駭警。贛害輟感、
 甄穀燔窳。秣秣麻苔、鑿藁鞣^㉓。 ¹⁵ 鈇獸然稀、丈表牒膠。

第五十三（原積第五三甲）

竊鮒鱗鱗、鱣鮪鯉鯉。慘怵鞣^㉔、²⁰ 玢整玢羔。冤晷暖通、
 坐嚶譟求。寥閭堪況、燎灼煎炮。²¹ 快狡息寐、夢^㉕寤□□。
 詢診辱耽、直擅隱傍。【百卅六】〈鮑□〉淫回、雷廉^㉖難條。惡蘭^㉗□□、

第五十四（原積第二四）

蕙蕙殆^㉘。响^㉙駭駭、摩剝刷儻。洵^㉚謁謁蝕、胗^㉛鬻忍□^㉜。
 俗儉缺姦、悵痕炕蕙。脰^㉝籥陷沙、遮^㉞查詢。鑿^㉟鍵繫總、
 納^㊱鞣^㊲囊。葬墳^㊳、¹⁹ 皚井始牟。繪^㊴綵燥紺、□□□□。

第五十五（原積第五三乙） { } 加増推定部分

緇纒紅綃、練縷素縹。釐鑠腰釧、帷募虛^㊵。弦鞞鞞、
 皮韋革鞞。屬^㊶廠剡謀^㊷、縱^㊸聒旋保。鞞^㊹鞞斷^㊺、擗^㊻扶^㊼鞞陶。
 令次睢徧、盡得所求。【百廿】 {延年益壽、上下敖游。兼吞天下、}

章序不明

原積第一八甲

□□听品品。鈹^㊽督督、鯁^㊾鮮^㊿鉞[㋀]。錐[㋁]刀[㋂]鋌[㋃]、[㋄]鈞[㋅]載[㋆]□□。
 劒[㋇]刃[㋈]標[㋉]尿、鋸[㋊]鋸[㋋]鈹[㋌]。杼[㋍]軛[㋎]略、□□□□。鞞[㋏]鞞[㋐]听[㋑]、
 輦[㋒]輦[㋓]乘[㋔]車。懸[㋕]〔絕〕□□、□□□□。□□□□、[㋖]陰[㋗]澤[㋘]潤[㋙]□□。

原積第四〇（乙）

盤[㋚]底[㋛]剗[㋜]□[㋝]。犖[㋞]脊[㋟]愧[㋠]邦、⁷⁴ 券[㋡]邗[㋢]區[㋣]、[㋤]邗[㋥]邗[㋦]邗。
 郡[㋧]邊⁷⁵沔[㋨]漢、崩[㋩]予[㋪]落[㋫]。[㋬]洪[㋭]越[㋮]斥[㋯]毫、焦[㋰]軛[㋱]微[㋲]銜。拴[㋳]□□□、
 訶[㋴]畢[㋵]謹[㋶]。鬼[㋷]魅[㋸]敦[㋹]時、[㋺]祖[㋻]靈[㋼]□。裔[㋽]順[㋾]懋[㋿]說、^㊀誦^㊁□□□。

漢牘本対応本文未見

北大本簡 78+簡 77

𠄎𠄎^㊁、□□^㊂。 百廿八

北大本簡 79

……□渠波^㊃

校記

- ①漢牘本原積（以下、原積）は「关」とするが、張伝官 2019、胡敕瑞 2020 に従う。
- ②原積は「快」とするが、張伝官 2020a に従う。
- ③原積は「體」とするが、白軍鵬 2019 に従う。
- ④原積は「犧」とするが、張伝官 2020 a に従う。
- ⑤原積は「漿」とするが、張伝官 2020 a に従う。
- ⑥原積は「巨」とするが、張伝官 2019 に従う。
- ⑦原釋は「躡」とするが、図版によれば「鞞」と見られる。
- ⑧原積は「苙」とするが、張伝官 2019 に従う。
- ⑨原積は「豐」とするが、張伝官 2019 に従う。
- ⑩原積は「磨」とするが、阜陽漢簡『蒼頡篇』C010 に従う。

- ①原積は「𪔐(繼)𪔑(續)」とするが、阜陽漢簡『蒼頡篇』C010、水泉子漢簡『蒼頡篇』暫30による補積に従う。
- ②原積は「盜」とするが、白軍鵬2019に従う。
- ③原積は「慕」とするが、図版によれば下部「心」は字迹が薄れて形体を把握しがたいため「暮」とした。
- ④原積は「遽」とするが、図版によれば「越」と見られる。
- ⑤原積は「隙」とするが、図版によれば「凜」と見られる。
- ⑥原積は「掌」とするが、張伝官2019に従う。
- ⑦章題「拓悝」について、北大本原積は該章第一簡の缺失により「□悝」とし、漢牘本原積は本文中のこの二字を「拓媯」とする。ここでは敢告可于2020が推定する北大本の章題に従う。
- ⑧原積は「[泉][絡]」とするが、張伝官2020aに従い〔 〕を除いた。
- ⑨原積は「輦」とするが、敢告可于2020に従う。
- ⑩原積は「徒」とするが、敢告可于2020に従う。
- ⑪原積は「春」とするが、張伝官2019に従う。
- ⑫原積は「窺」とする。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、「窺」(支部)ではなく「窺」(耕部)と見られる。
- ⑬原積は残存する右側部分を「孰」とするが、敢告可于2020に従う。
- ⑭原積は「陵」とするが、図版によれば「菱」と見られる。
- ⑮北大本簡23の当該字は右傍の上部を缺失するが、漢牘本により「脯」字であることが知られる。
- ⑯原積は「蠶」とする。図版によれば下部の「虫」は確認できるが、上部の形体は把握しがたいため「𪔒」とした。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、支部または支部と合韻の関係をもつ韻部に属する文字と見られる。
- ⑰北大本原積は「𪔓」とするが、漢牘本により左偏の「目」を補う。この点については張伝官2020b参照。
- ⑱原積は「赴」とする。図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、「赴」(屋部)とは異なる支部または支部と合韻の関係をもつ韻部に属する文字と見られるが、現時点では積読が困難であるため「□」(未積字)とした。
- ⑲原積は「程」とするが、図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部および同句中の字義との関連から、「程」(耕部)ではなく「祗」(脂部)と見られる。
- ⑳原積は「葦」とするが、図版によれば上部は「竹」に作り、「篋」と見られる。
- ㉑原積は「蝸」とするが、図版によれば「蝸」と見られる。
- ㉒原積は左側下部を「大」とするが、図版によれば「犬」に作り、「鷓(鷓)」と見られる。
- ㉓原積は「𪔔」とするが、図版によれば字迹が薄れて右側の「延」の形体も把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、「延」(元部)の形声字ではなく、之部に属する文字と見られるが、現時点では積読が困難であるため「□」とした。
- ㉔当該字は北大本竹簡の断裂部にあたり右傍の上部が薄れて形体を把握しがたい。北大本原積は「𪔕」とし、注釈[九]において「右旁有損，疑是「決」字」と述べる。この推定は阜陽漢簡『蒼頡篇』C039にもとづくものと思われるが、漢牘本も「決」に作り、その妥当性が裏付けられる。
- ㉕原積は「𪔖」とするが、張伝官2019に従う。
- ㉖原積は「脚」とするが、張伝官2019に従う。
- ㉗原積は「𪔗(𪔗)」とするが、図版によれば「𪔗(𪔗)」と見られる。
- ㉘原積は「減」とするが、図版によれば左偏は「𪔘」に作り、「減」と見られる。
- ㉙原積は「霈」(月部)とするが、図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、幽宵合韻部に属する文字と見られるが、現時点では積読が困難であるため「□」とした。
- ㉚北大本は右傍を缺失するが、漢牘本により補う。この点については張伝官2020b参照。
- ㉛原積は「𪔙」とするが、敢告可于2020に従う。
- ㉜原積は「簾」とするが、張伝官2020aに従う。
- ㉝原積は「𪔚」とするが、図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部との関連から、「𪔚」(侵部)とは異なる幽部または幽部と合韻の関係をもつ韻部に属する文字と見られるが、現時点では積読が困難であるため「□」とした。
- ㉞原積は「𪔛」とするが、当該字は韻脚にあたり、同章(板)中の他の韻脚の韻部および字義との関連から、「𪔛」と見られる。
- ㉟原積は「課」とするが、張伝官2020aに従う。
- ㊱原積は「更」とするが、図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。同章(板)は「爰歴」に属し、当該字は韻

脚にあたることから、「更」（陽部）とは異なる魚部または鐸部に属する文字と見られるが、現時点では積読が困難であるため「□」とした。

④⑦原積は「𩺰」とするが、図版によれば字迹が薄れて形体を把握しがたい。同章（板）は「爰歴」に属し、当該字は韻脚にあたることから、「𩺰」（支部）とは異なる魚部または鐸部に属する文字と見られる。ここでは一案として「𩺰」（魚部）とした。

④⑧北大本原積は「𩺰」とするが、王先虎 2020 に従う。

引用文献目録

- ・張伝官 2019 「談談新見木牘《蒼頡篇》の學術価値」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2019 年 12 月 25 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4510>
- ・白軍鵬 2019 「漢牘本《蒼頡篇》読後」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2019 年 12 月 26 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4511>
- ・張伝官 2020 a 「新見漢牘蒙書三種校読筆記（四十四則）」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020 年 1 月 6 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4521>
- ・胡敕瑞 2020 「新見漢牘《史篇一》《史篇二》校読札記」、清華大学出土文献研究与保護中心網站、2020 年 2 月 14 日、<https://pan.baidu.com/s/128LMBQvnXnA8If-dBjTx0w>
- ・王先虎 2020 「北大藏西漢竹書《蒼頡篇》七七号殘簡試補」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020 年 8 月 14 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4613>
- ・敢告可于 2020 「漢牘《蒼頡篇》校積・対読与章序研究」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020 年 8 月 16 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4616>
- ・張伝官 2020 b 「漢簡牘《蒼頡篇》校読零札」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2020 年 8 月 16 日、<http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/4617>

[附 記]

本稿は、筆者による以下の研究発表にもとづく。発表後の質疑応答の席上、ご質問やご意見を賜った各位に対し、御礼を申し上げたい。

- ・「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』の分章復原—『漢書』芸文志所載二十章本考—」（第 73 回中国出土文献研究会、2022 年 2 月 19 日～20 日、オンライン）
- ・「北京大学藏漢簡『蒼頡篇』の分章に関する試論」（第 32 回書学書道史学会大会、盛岡大学、2022 年 10 月 29 日～30 日、対面・オンライン併用）

また本稿は、JSPS 科研費 19H01193（研究代表者 湯浅邦弘教授：大阪大学）の助成による研究成果の一部である。